

むかしあつたけど

漆山の昔話と伝説
大道寺翁の昔話
(2)

編 武 田 正

むかしあつたけど

漆山の昔話と伝説
大道寺翁の昔話
(2)

編 武 田 正

28 酒吞童子 五八

(4) 大木大明神

29 狐のはなし 五八

(5) 鶴布山珍藏寺

30 青鬼 五九

(6) 六部塔婆

31 沼の平 六〇

(7) 羽黒神社と上杉の封じ道

32 八幡太郎のうれしや沢 六〇

(8) 大仏の板碑

33 時庭の六本仏 六一

(9) 藤本家板碑

池黒付近の伝説私考 六五

(10) 永仁の碑

(1) 謎のうたよみ

(11) 三堀観音

(2) 池黒の地名と馬頭観音

(12) 梨郷江

(3) 三塚

第二部 大道寺重栄翁昔話(その二) — 長井市五十川 —

1 人身供養 — 蛇の精 — 七八

5 オタタカ鳥 八八

2 果てなし話 八二

6 かちかち山 八九

3 蛇と娘(蛇簪) 八二

7 地藏浄土 九九

4 桑原 — 久留島武彦から聞いた話 — 八六

あとがき 一〇七

凡 例

- 一、昔話は録音テープより忠実に文字化した。
- 二、「池黒付近の伝説私考」は著者の了解を得て『宮内文化史資料』4・5・6・7集より転載した。
- 三、伝説については原話になるべく忠実に配慮したが一部書き改めたものもある。
- 四、大道寺重栄翁の昔話は拙著編『かつばの硯』（S 49・7・30刊）の10話に続くものである。

第一部 漆山の昔話と伝説

1 オタタカチヨウ

弟はとっても兄を大事にしたもんだ。そして兄さうまいものばかり食^かせてよ、大事にしたらしいんだ。そうすつど。

「おれさまで、こがえ大事にして、うまいもの食せるもの、弟なの何食^かつていんだかわかんね」

と思つて、ある日、弟を殺して腹をさいて見たんだ。そしたば、すばらしく粗食^{そしょく}だつた。ろくなもの食^かつていねがつた。

「いやいや、こがえに、おれどさばりうまいもの食^かせつたのか」

それから今度、自分で殺してしまつたもんだから、神さまからオタタカ鳥にさつでしまつて、

オタタカチヨウ 弟恋し オタタカチヨウ

て、八千八声鳴かねうち、もの食んねことになったんだど。どーびんと。

(平井とよ)

2 オタタカチヨウ

兄貴さ芋のいいどこばり食せで、自分が親芋のうまくないどこばり食って、何でもそういう風にしたど。そしていつだか、

「自分に、ごだいうまいもの食せるんだら、弟はもつとうまいもの食ってんべ」
て、弟の腹切ってみたば、そのうまくない芋ばりだったど。そして鳥になって、
オタタカチヨウになって、八千八声鳴かねど、餌^も食んねど。
(佐藤七右衛門)

3 かわうそときつね

かわうそ、魚とりしったのき、きつねが行つて、かわうその取つた魚を御馳走になつてだど。そしてこんど、

「お前も、人の取つたの食つてねで、魚とりなど造作ね」

て言うたど。そしたら、

「なじよして取つこど」て言うたら、

「尻尾、氷の中さ入つで置ぐど、みな一人で掛かつて来つから、そして取つて食うどええべ」

て、教えらつじやど。そのきつね、尻尾入つでいつまでも、掛かるうち待つて
だらば、氷張^{すが}つて取んねぐなつてよ、そこさ狩人来たもんだから逃げつかと思つ
たげんど、とつても逃げらんねがつたていうんだな。そして捕らつでしまつて、
そのきつねが常にかわうそどこ欺^ひしてよ、お魚とつて食べだり悪いことしつたら
しいんだな、そんで今まで他人欺^ひしていたから、今度はかわうそに欺さつで、自

分が命なくしたんだど。どーびんと。

(平井とよ)

4 ねずみの嫁入り

むかしあつたけど。

ねずみにええ娘出たもんだから、

「そがえにええ娘だもの、世界で一番えらい人さ呉^けてやらんなね」
て言うたど。

「一番えらい人、お日さまだごで」

で、お日さま言うたら、お日さま、

「一番世界でえらいのおれでない。一番えらいのは雲だごで。なんぼおれ本氣になつて照らしても、雲に來られつど隠つでしまう」

そこで、ねずみは、今度は雲さ行ったら、雲は、

「おれよりえらいの、風だ。風来つど吹きとばされる」

今度、風さ行ったら、風に、

「おれよりまだまだえらいのは壁だ。なんぼしても壁にかなわね」

そしたら壁さ行って、「貰ってもらいたい」って言うたら、

「おれ、とつてもえらいの、おれよりえらいのはねずみだ、ねずみにかかつては、なんぼ堅い壁だつてとつてもかなわね、すぐ破らつてしまふ」

て言われて、とうとうねずみのお嫁になつたど。んだからやつぱりあまり上は選ばんねもんだど。どーびんと。

(平山とよ)

5 かちかち山

むかしあつたけど。

おじいさんが豆蒔きに行つたんだな。豆蒔いっだら、狸出てきて、おじいさん蒔いっだら、

一粒まいたら くっされろ

二粒まいたら くっされろ

て、石さ尻かけているもんだから、ごつしやいで、おじいさん、鉋持^{たが}つて追っかけっど、逃げてよ、次の日、そこさモツチ置いたど。石の上によ。そしたら次の日また来て、馬鹿にしてるもんだからよ、追っかけたら、狸は尻喰^くつがつて動がんねぐなつてよ、生捕りして、家さ来て下げっだど。そしておばあさんに、

「決して狸の縄とくなよ」

て、また畑さ行つたんだごでな。

こんど、おばあさん、粉叩^{はた}きしつたど。そしたら、

「おばあちゃん、おれ代^かつてやつから、解いて呉^くろ」

て、あんまり言うもんだから、解いて呉^くだら、おばあさんどこ杵^きで殺してしまつたんだもな。そしてあばあさん料理してしまつたんだど。そして夜、おじいさん

帰ってきたら、「狸は？」て言うたら、

「おじいさん、疲^くつで来んべから、料理して待つてたから、」

て、おばあさんのそれ食せだど。そしてこんど、

「おじいさん、うまいがったべ」

て言うたら、夜になって、

「ばば肉、しないも道理、流しの下の骨から見ろ」

て、逃げて行つたど。そんで外さ出てみたら、流しの下さおばあちゃんの骨力
ラばりあつたど。おじいちゃん泣いっだどこさ兎が来たど。

「なして、おじいちゃん泣いっだんだ」

て言うたら、

「こういうわけで、おばあちゃん殺さつた」

て言うたんだど。

「ほんじゃら、おれ仇とつて呉^くつから……」

て、狸のどこ、「薪とりあえべ」て言うて、薪とつて兎がうしろになって、狸の

背中さマツチで火つけたど。

「何だか、上の方でボウボウていうの、何だ」

「ボウボウ山のボウボウ鳥だ」

そのうち、「アチチチ……」て、背中一面火傷したど。そしたら兎逃げて行つて、

こんど膏藥売りに来たど。そしたらその膏藥、南蛮粉いっばいつけた膏藥で、

「火傷に効く膏藥」
やけど

て行つたもんだから、狸そいつ買つてつけたもんだから、痛くて痛くて跳ね上がつて苦しんだど。それから今度、舟のりに誘つたんだど。

「何で舟拵こしやう」て言うたら、

「土で一生けんめいになつて、こういう風にして拵うどええ」

て教えらつじやど。そして土舟拵つて、兎は木の舟拵つて、舟のりに行つたんだど。そして行つてゐるうちに、狸の舟は土だから、少しとろけかかったど。そして、その土舟突つついて、沈んで死んでしまつたど。そんでお婆あちゃんの仇とつて呉だんだど。どーびんと。

(平井とよ)

6 かちかち山

むかしあつたけど。

じいさんが山さ豆蒔きに行つて、

一つぶ蒔いたら千なれ

二つぶ蒔いたら二千なれ

て蒔いったら、狸あ来て、

一つぶ蒔いだら腐されろ

二つぶ蒔いたらドス豆

なて、悪口いうたもんだから、じいさんが追^ほえば、また来て、数限りなく悪態するもんだから、じいさんが今度ごしやいで、モツチ持つて行つて、木の根の切株さ、くつつけだ。そうすつど狸また出はつて来て、そこさ休んで悪態した拍子に、皆くつついてしまったて。そいつをじいさんが縛^はつてきて、下げだていうんだな。そうすつどじいさんが、

「ほんじゃ、また行つて、豆蔕おやき終おやしてくる」

て、出かけて行つて、行つた後さばあさんが粉はたきしつた。やつぱり狸ていうな、ここらでも今いるが、ちよつと死んだふりする奴で、死んだふり上手なもんだもんで、んだからじいさんが居ねうち、婆さんば欺して、

「おれが粉はたいて呉けつから、縄といでけろ。ばあさんさばり難儀させんな見かねる」

て言うて、詐してたていうんだな。そうすつど、ばあさんも信用して縄といて呉けつじやていうんだな。そうして粉はたいたの、ばあさんさ、

「はだげたでねえか、見てけろ」

て言うので、ばあさん曲つたとこ、頭を杵で叩いて、ばあさんどこ殺して、そしてかえつてが、ばあさんとこ狸汁だなて、ばあさんに化けて、じいさんの帰りを待つてだど。そうすつど、じいさんが帰つてきて、まず御馳走食つてみたところろが、

「ずいぶん、萎すなこい」て言うたところが、

「道理で萎こい、婆だこで」

て言うて逃げて行つたてよ。そうすつど、じさま泣いっただこき、月夜なもんだから、兎来て、

「なして泣く」て聞いたところが、

「こういうわけで狸に欺さつて、ばばどこ殺さつた」

「おれ、仇とつて呉つから」て、こんど兎が狸どこ尋ねて行つた。

「焚物とりあえべ」て言つて、そして自分が狸さばり、

「雨降つど、取りかえしつかねんだから、いっばい取つてあえべ」

て、杉葉から柴ばり、でつつら背負わせて、ほうして、

「おれあ、うしろになつて、めんどろして行んから……」

て、狸どこ先に立てて来たて言うんだ。途中でやっぱりうしろから火打ち石と打金で火つけた。そうすつど、「カチカチていうの何だ」て言うたらば、

「カチカチ山だ」

そして燃えだの、「ボウボウ鳥だ」て、誤間化して、そして火傷したずだこで。

火傷してさんざん苦しんだどこさ、今度は南蛮粉売りに化けてきて、

「これは火傷の妙薬だ」て、そしてみな背中の中火傷したどこさ南蛮粉つけてくれて、ひどい目に合わせだど。

そして後から、こんど火傷治ったどこさ、舟のりに誘いに行ったど。川さな。そして狸さ泥で作った舟、自分が板でこしゃった舟、狸どこ深みさおっつけてやって、仇とって呉^けたど。んだから悪いことはさんね。とんびんと。(佐藤七右衛門)

7 猿 蟹 合 戦

むかしあつたけど。

猿、柿の種子拾^たつたど。蟹がおにぎり持^たつていたんだけど。そしたらその猿が、

「蟹君、蟹君、わたしの柿の種子と取換えっこしろ」
て言うたど。

「そがな柿の種なて食んねくていらね」

「こいつ植えて毎日水掛けつど、すぐおがつかから、そうすつどじきに実^なる」
て言わつて、そして取換えて植えて、毎日水かけて、

「早く芽を出せ、柿の種子」

て言うたば、芽出だつて。そしてこんど、

「早く葉を出せ、柿の種子」

て、毎日水かけたら葉が出たど。そしてだんだん、だんだんしたら、

「早く実をなれ、柿の種子、早く実をなれ、柿の種子」

て、一生けんめいに慈生したらは、すぐ実なつて、柿の実もぎに蟹は登らんね
がったど。したらそこさ、猿来て、

「蟹さん、何しつた」

「柿の実なつたげんども、振^もがんねくて見つた」

「ほんじゃ、おれ、振^けいで、呉^けつから……」

なて、上さあがつて行つて、もいで食つて、自分ばりみな食つて、蟹が、

「猿さん、おれさも振いで呉ろ」

て言うたらば、青いどご、ぶつつけたど。みなぶつつけて、そこら怪我したど。

蟹がよ、そして家さ帰つて寝つたら、臼が来て、

「蟹さん、何してそがえに泣いてる」

て言わつじやんだけど。「こ^ういうわけだ」て、今まで猿にさつだごどみな教えだど。そうすつど、

「ほんじゃ、おれ仇とつて呉^くれつから」て。そしたらこんど、卵が来たど。そして、蜂も来たど。

「ほんじゃ、三人で仇とつて呉^くつから」

て、その臼達、猿の家さ、みなかがんだど。臼が戸の口の上さあがつて、蜂が味噌桶さ入つてだど。卵が炉さ入つてだど。そしてそこさ猿帰つてきて、「さむい、さむい」どがて、炉、ほげだど。そしたら卵はんじげで、顔さみななつたもんだから、「いや、痛い」なて、味噌桶の味噌塗つかど思つて、そしてたら、蜂に刺さつじやど。そしたら猿、こんど逃げんべと思つたら、上から臼落つてきてつぶして、

とうとう猿殺さつじやど。んだからいじわるするもんでない。どーびんと。

(平井とよ)

8 舌 切 雀

むかしあつたけど。

あるどころに、おばあさんとおじいさんがいだっけど。おばあさんが一生けんめい糊張りしたら、おじいさんは山さ柴刈りに行つてよ、そして山から帰つて来たら、鳥籠、いつもここさ下げていたに、空なもんだから、どうしたんだと言うたら、

「一生けんめい、糊張つかど思つて張つていたら、糊みな舐めてしまったから、あんまりごしやげるから、舌切^{べろ}つて逃がしてやった。

て言うたそうだ。そして、

「んじゃ、どこさ行つたんだか」

て、おじいさんに、めんごがらうでいたもんだからな。次の日、こんど山さ出かけたど。

舌切雀、お宿はどこだ。

歌いうたい行つたど。ほして行つたら、竹やぶから、

「おじいさん、こっちだ、こっちだ」

て、呼ばらうで行つたど。そしてら喜んでその雀、

「おじいさんだ、おじいさんが来た」

て言うたら、出てきて、兄弟衆からみな出て、もてなししたど。そして酒肴でもてなして、こんど歌踊りで大変なだつたど。

「あまり暗くなつても、おばあさん心配すつから帰るはあ」
て言うたら、

「お土産に、重いツヅラええか、軽いツヅラええか」
なて言わつじやがら、

「年寄りだから、軽い方もらって行くべはあ」

て、貰って来たてよ。そして家さ来てみたば、いやすばらしいものばかり入っ
ていだったど。宝ものなあ。したば、そのおばあさんも、

「ほんじゃ、おれも行ってくる」

て行つたなてな。そしたら、「雀、雀、お宿はどこだ」て行つたら、竹やぶ分つ
て行つたら、また御馳走さっじやど。そして、

「おばあさん、お土産何ええか、重いのか、軽いのか」

て聞いたら、

「おれ、力あつから重いツヅラもらって行くかはあ」

て言うたど。そしたらその重いのか貰って途中まで。家まで持つて来らんねがっ
たど。重たくて、そして途中で開けたら、いや、抜け首だの、お化けいっぱい
よ、そこらなめらつじやり、食つつがったり、血だら真赤にして家さかけ込んだ
ど。どーびんと。

(平井とよ)

9 三枚のお札

むかしあつたけど。

お寺の小僧が栗拾いに行きたいと言うたら、和尚さまが、

「山には山姥がいるから、三枚のお札くれてやるから」

て、栗拾いに行つたど。栗拾いしてるうちに日暮れてしまつて、帰らんねくなつて、そのうちちよつと灯り点いた小屋あつたもんだから、入つて行つて、

「どうか一晚泊めてくろ。栗拾い来て暗くなつてしまつたから」

て言うたら、

「ええどこでないから、泊れ」

て言わつて泊つたら、夜中に目さめた。見たら、何してつと思つたら、一生けんめいで出刃包丁砥ぎしつたんだど。そして何すんなだと思つて、そおつと見たらば、

「これで、小僧、晩げ料理して食うのだ」

て言うもんだから、恐^おかなぐなつて、

「便所さ行きたくなつた」

て言うたど。そしたら、

「便所だごんだから、外さ行つてこい」

て言うもんだから、お札を一枚便所の柱に貼った。この綱引つぱつたら、「まだだて言うてな」て言うて逃げたど。ばばは綱引くど、「まだだ、まだだ」て言うもんだから、行つて見たら、綱ばかりであつたど。ほんで後追いかけて行つたら、逃げつどこさ追いかけたら、

「大山出ろ」

て札投げたら、大きな山出たげんど、そこ走るうちに、また追いつかれそうになつたもんだから、

「大川出ろ」

て言うたど。そしたらまた大きな川出たらば、そこも、山姥漕ぎ始めて、追いつかれそうになつたほでに、こんど、

「大火事出ろ」

て言うたら、大火事になって、そこで山姥焼け死んで、ほうほうの態で家さ帰つて来たど。どーびんと。
(平井とよ)

10 猿 聲 入

むかしあつたけど。

おかあさん居ねくてよ、三人の娘とおとうさんばかりだったらしいんだな。

ある年、旱魃でとても水かかんねくてよ、米も穫んねような心配したどこさ、

猿が来て、

「お前の娘三人いたうち、一人、おらどさ呉^けつじど、水、一晚げに皆かけて呉^ける」

どかて言わっで、

「ほんじゃ、おれ娘一人呉^けつから」

て言つてよ、娘さも聞かねで、自分ばり約束したんだど。そしたら家さ来て、一番の娘さ言うたら、

「そがな猿さなて、お嫁に行かね」

て言わつて、「いや困つたな」どかて、そして二番目の子どもさ言つたら、

「猿さ嫁なて、そげな馬鹿くさい、行つていらんね」

どかて言わつて、そして三番目は、「おさん」て名付かつたて言うたか、その娘が、「ほんじゃ、おどつつあ、おれ行んから、嫁に行んから」

て言うたんだそうだな。

そしてその晩げ行つたらば、たつぷり水かかつてだけど。そして次の日、泣く泣く呉^けでやつたべちや。そうして暮しているうち、ある日、猿が、

「おさん、今までいっこうに里さ帰んねから、いっぺん里帰りしたらええんねが。何お土産もつて行つたらええべ」

て言うたら、

「おら家のおどつつあん、餅好きだから、餅持つて行つたらええべ」

「そしたら、何餅もって行ったらええべ」

「うちのおどつつあん、何かさ入ったな嫌いで、臼がらみ好きなんだ」

どかて、言うたそうだな。そうすつど本気なつて、猿は臼で餅ついたらしいんだな。そしたら、そいつ背負つて二人で降りたら、きれいな桜の花咲いていたど。

「花、きれいだから、桜の花一つ枝折つて、お土産にもって行きたい」

て言うたら、

「ほんじゃ、おれが登つて行つて採つてくる」

どかて、臼背負つたまんま登つて行つたど。そして中段ごろまで行つたら、

「おさん、これか」て言うたど。

「まだその上だ」て言うたら、また上さ行つて、

「おさん、これか」て言うたら、段々その上、その上で、ずんずんと上まであがつて行つたど。上細くなつてだもんだから、その枝がらみ落つて来て、猿死んでしまったど。そして娘ばり家さ帰つてきたど。どーびんと。

(平井とよ)

11 桃 太 郎

むかし、じいさん、ばあさんいだったど。して、そのおじいさん、山さ柴刈りに、おばあさんが川さ洗濯に行ったら、向うから大きい桃流つて来たど。ツップカップ、ツップカップと流つて来たど。よつく見たら二つ流つて来たんだど。

赤い桃 こっちやこい

白い桃 そっちや行け

て、そして赤い桃拾ってきたけど。そして赤い桃、家さもつてきて、

「じんつあ帰ってくるまで、ここさ上げておいて、山さ行つたから帰ってくるまで」

て思っていたら、おじいさん帰つて来て、

「赤い桃拾つて来たから、割つて御馳走になつか」

なて、マナイタもつてきて、割ったば、中から男の子出てきたてよ。ほして、じいさんばあさん、

「いや、桃から生まってきたんだから、桃太郎で名付けんべ」

て。そいつ、めんごくでめんごくで、おがしたんだど。だんだん大きくなつて力持ちになつたど。ある時、

「じいちゃん、ばあちゃん鬼が島さ鬼退治に行つてくつから、やつておくやい」
て言うたど。

「まだ、お前危ないから、そんがえなどこさ行かんね」

て言うたげんども、聞かねで行くて言うから、

「ほんじゃ、キビ団子こしやえで呉^けつから」

て、じじちやとばちやと、キビ団子こしやえたど。ほして一生けんめい、そいつこしやつて呉て、出かけたど。

そこさ猿来て、

「桃太郎さん、おれどこも家来にして呉ろ」

て言うたど。したら、キビ団子一つ呉で、家来になつたど。こんど行つたら、犬来たど。犬にもまた「桃太郎さん、桃太郎さん」て言わつで、「お前も家来になつ

か」て言うたら、「なる」て言うて、そいつさも一つ呉たど。

そのうちにキジ飛んできて、キジも、

「桃太郎さん、あたしに一つ下さい」

て言うど、そさも一つ呉て、こんど、みな連れ立って、鬼が島さ行つて、鬼が島さ行ったら、青鬼が門番しつたの倒してのりこんで、みんなで一生けんめい戦つたら、猿は青鬼の上さあがって、かっちゃいだり、キジは突つついて、犬あかぶついで、とうとう勝ったんだど。そして宝物みな分捕つて家さ帰つて来たんだど。そしてじいさん、ばあさん、安泰になったんだど。どーびんと。(平井とよ)

12 糠福・米福

むかしなあ、あるところによ、糠福が先妻の子で、米福が後妻の子で、いだつたど。そして、毎日掃除だの、いろいろなこと糠福ばかりさせらつていたらしい

んだな。いじめらっでいだんだど。

あるお祭りの日に、

「今日はお祭りだから、早く米福、終おやして、お祭りさ行げよ」

て言わっで、そして、

「糠福は、お前は、家に留守居していらんなねからな。この米搗いておけよ」

なて言わっだど。そして米福は喜んで、そのお祭りさ、ええ着物を着せて、そのおかあさんが車さのせて、連つで行ったら、糠福の方は自分も行きたくて、自分も行きたくていだげんども、おかあさんに行くなて言われるもんだから、我慢したら、前のお母さんがでてきて、

「これは、三度さえも振っど、お前の願いごと何でもかなうなだから、これ、欲しいものあつたり、また自分の願い事ときは、こいつ三度振れ」

て教えらっだど。そして自分もこんどお祭りさ行きたくなつたもんだから、

「ええ着物出ろ」

て、三度言うて振ったらば、着物とってもええものばり出だどがてな。そして

「下駄出ろ」「車出ろ」どかて言うたら、みな出て、そして用意して行つたど。そして行つたら、米福も見つだけ、

「あれれ、姉さん来つた」て言うたら、

「姉さんなて来ねごで、家で米搗きしつたもの来らんねごで」

「ほだたて、似た人だ」

どかて言うたど。糠福は早く家さ帰つて来たらしいんだな。そして何か思い出したんだが何だか、車ぐるぐると井戸のぐるりのせて走つたらば、その米福が井戸の中さ入つて行つて死んだどか。自分で継子いじめたから、罰当つたんだど。
とーびんと。
(平井とよ)

13 果てなし話と長い話

むかし、ずうつと行つたけずまなあ。

したらは、板塀あつたけど。

ほうしてまた、そこひよんとくぐつたれば、

またずうつと行くどこある。

ずうつと行つたらば、また板塀立つてだけど。

ずうつと行つたど。

ずうつと行つたれば、また板塀あつたけど。

そしてまたそいつ、やつと抜いで、ずうつと行つたど。

したらまた板塀あつたど……。

× ×

蛇が穴から出てきたど。

今日ものろのろ、明日ものろのろ。

(佐藤七右衛門)

(平井とよ)

14 地蔵浄土

むかしむかしあつたけずまなあ。

ええおじんつあとわるいおじんつあどいだっけど。

そしてある日のこと、ええおじんつあが、

「おばんさ、おばんさ、団子あぶりでもして食うべか」

ていうて、膳部から団子と、火棚の上がわから茶ホーじ降ろして、カランコロ
ン、カランコロンと煎つていだっけど。したばカランコロンてしたらば、団子、
ぽんとなつて跳ね上がつてコロコロ、コロコロて転んで行つたど。したば、

「団子どの、団子どの、どこまでござる」

したらば、団子、

「家の前の、穴の中の、地蔵さまのどこさ行くなだ」

したば、ええおじんつあ、ちような持^{たが}つて、穴堀り掘り、ずうつと行つたけど。
そしたらば、穴の中に地蔵さま立つていだっけど。そしてええおじんつあ、

「地蔵さま、地蔵さま、団子どの来ねがったべが」

て言うたらは、地蔵さま、

「ああ、今来たつけ、あんまりうまいそうだったもんだから、いま御馳走なつたどござはあ。その代りなあ、おじんつあ、ええこと教えつから、おれの膝かぶさ上がれ」

「いや、地蔵さま、地蔵さま、地蔵さまの膝かぶさなの、おら、とっても上がらんね」

「ええから上がれ」

して、上がった。今度、地蔵さま、

「おじんつあ、おじんつあ、肩さ上がれ」て。

「おら、地蔵さまの肩さなの、もつたいなくて上がらんね」

「ええから上がれ」

「ほだがつす」

ほうして上がった。ほうしたれば地蔵さま、また、

「おれの頭の上さあがって、二階さ上がって行げ」

て言うたど。そしたらば上がって行つてな、

「いまに鬼なんかえ、いっぱい来つから、黙つてで、おれ、パタパタしたとき、コケコツコーて言えよ」

そうして上がって見つだば、こんどは赤鬼一番先になつて、青鬼、白い鬼だの、じゃんじゃら鬼など、鉄棒かな引っぱって来たけど。そしてええおじんつあ、何すつかと思つて見つたば、地藏さま、パタパタて言うた。そしたばおじんつあ、「コケコツコー」て言うたど。そしたば、青鬼、

「なえだい、赤鬼、今日早いようだな。一番鶏鳴いだぞはあ」

したば、まだずうっとしつたらば、パタパタて音したもんだから、「コケコツコー」て、

「ほら、二番鶏だ」

そのうち、また地藏さま合図したもんだから、「コケコツコー」て言うたらば、「ほら、夜明けんど。ほれ、宝物はみなそこらさ押つけて、早くあえべ、あえ

べ」

て言うたど。ほうしたれば、鬼などみな行つたもんだから、地藏さま、

「こらこら、ええおじんつあ、そいつみな呉つから、持つて行げ」

て言うたど。ほしたれば、ええおじんつあ、

「こがえいっばい、おらいらねげんども」

「ええから持つて行げ」

て言わつじやもんだから、カマスさ入つて家さ来て、したば、おばんさ、

「何背負つて来たもんだ」

したば、

「いや、団子どの、追掛けて行つたば、穴の中で、こがえなこと地藏さまに貰つて来たぜ」

そして埃なんか選^えつて箕さなどあけて、埃選^えつてだば、われ、おじんつあ隣から来て、

「おっええおじんつあ、なえだ。そがえ宝物、どつから持つて来たごんだ」

て言うたもんだから、

「こういうわけで、団子焙りしたば、あの穴の中の地蔵さまに教えらつじえ、こ
がえして貰つて来たどこだでこ」

「何どこや、ほんじゃ、おれも家さ行つて、団子あぶりさんなね」

悪れおじんつあ、ガラガラ家さ行つて、

「ばんちゃ、ばんちゃ、あの団子持つてこい」

そしてまた、火棚から茶ホージ出して、ガランコロン、ガランコロンで団子つ
かまえて、庭の方さぶ投げて行つて、

「そつちや行げ、そつちや行げ」

押つつけてやつて、ほうしたば穴の中さ、びりびり入つてやつて、ほうしてま
た追っかけて行つたば、地蔵さまいだつけど。

「地蔵さま、あの団子どの来ねけがつたべが」

「団子どの行つたそ、そこにいだでそ」

そしたば、悪れおじんつあ、

「地蔵さま、地蔵さま、こいつ食えず」

団子、ぶりびりと地蔵さまの口さ食せで、地蔵さま、「あつ」て吞んでやったど。

そしたば、膝かぶさ上がれても言わねな上がつて行つたど。そしたらば、また赤鬼だの青鬼だの、白い鬼だの、じゃんじやら鬼だの、鉄棒ひつぱつて来たど。悪れおじんつあ、「来た、来た」なて見つたど。ほうしたばまた博奕打ち、「それ」なてやった。今度、地蔵さまに。パタパタなて、教えられもしねな、コケコッコーて、一番鶏。

「おつ、何だい」

赤鬼は、「今日は早いなあ、一番鶏鳴いた。おかしいなあ」なて言うたど。

また悪れおじんつあ、コケコッコーて言うた。ほうしたば、

「何だか人くさいな、昨日の宝物はさっぱりないし、こらおかしいなや赤鬼」

「ほんじゃ、探してみんべ、居だでこ、この野郎」

ほうして、悪いおじんつあどこ、小指と親指、ちえんなて上げで、連て来て、

「この野郎、われごどばりしてる。昨日のなも、みな、ニサ（お前）だべ」

「ほんねえ、おれでないから、どうか堪忍しておくやい」

「わかんね」

なて、今度は鉄棒で、バエンバエン叩がつて、ほうしたば細長くなつて、なんぼも上側の方さ上がつて行つた。

「こんどからしねがら、堪忍しておくやいシ」

ほうして、ガラガラ逃げて来た。んだから悪れごどざあさんねごんだぞ。また明日、別なこと教えつから、どーびんと。

(佐藤七右衛門)

15 地蔵浄土

おじいさんが庭掃きしつたら、団子落ちでだけど。そいつを拾うべと思つたら、団子が穴さコロツと入つて行つてしまつたもんだから、そのおじいさんが、

団子どの 団子どの どこまでござる

て言うて、かまわずその団子さ追っかけて行つたんだ。したらばとっても広いところさ出て行つて、そしてそこさ地蔵さま立つてだつけど。

そこで日暮れてしまつたど。

「そこに青鬼、赤鬼、いっぱい来て、博奕打ちすつから、刻ときつくれ」
て、地蔵さまから言わつたど。「三番、刻作れ」

そのじいさんがそこにいたら、青鬼、赤鬼いっぱい来て、博奕打つたど。そうすつどこんど、一生けんめい博奕打ちしてで、銭いっぱい出したら、そのうち、コケコツコーて、おじいさんがやつたど。

「一番鶏だから早くしろ」

なて言うたど。しばらくおもつて、またコケコーて言うたら、

「いよいよ三番鶏、明るくなつたから」

て、銭などみな置きつ放しで行つてしまつたんだつていう話だど。そしたら地蔵さまに、

「その銭、みな、じんつあのだから、お前みな持つて行げ」

て言わっだのよ。そしてその人お金持になったのよ。そこさ隣のばさま来た。その錢見て、

「どっから、こがえにもらつて来た」

て聞いたら、地藏さまさ行つて、こういうわけだったて言うたら、

「おら家のじさまも団子もたせてやらんなね」

て言うて行つたど。そしたら団子は転ばねがった。転ばしてやつて、その中さ追っかけて行つたら、やっぱり地藏さまいて、それから同じにしたげんども、上がれても言わない上がつて、刻作っているうちに、屁出て、フフと、そのじさま笑つてしまつたら、「にせものだ」て、寄つてたがつて鬼にこらしめらつて、ひどい目に会つて歸つて来たど。んだから決して人真似するもんでないど。どーびんと。

(平井とよ)

16 団子どの

仏さまお詣りに連て行がっで、団子上がってだ、その団子、別当していただいで、新しい団子あげて来んなねなよ。そして丈夫で風邪なのひかねように手合せて来んなねもんだ。そしたらコロコロで転んで行った。

団子どの 団子どの どこまでござる

あん中原の堂までござる

ていうたもんだ。

団子、ねずみ穴さ入ってしまったから、自分も入って行ったら、モグラとかねずみに食ってしまつて、穴さ入って行くのだから、拾わんねごではあ。とーびんさんすけ、さんまいだ。

(高橋よしの)

17 南の山の馬鹿聲話 蛇の目の唐傘

南の山の馬鹿聲、嫁をもらうことになったんだけな、そしたら、おむかさり（嫁）来たら、蛇の目の唐傘さして来たんだど。そんで大きなさして来て、なじよして家さ寄せんべて、一生けんめいで、みんなで戸はずしてよ、戸皆開けて待つてだれば、家の前さ来たら、唐傘しぼませてよ……。南の山はぼうぜんとしたど。

（平井とよ）

18 南の山の馬鹿聲話 熱つ山あつ

まいど、嫁もらつたてよ。そしたらお姑さまと嫁さま、団子つくりしたど。そしたら腹へったべちや、嫁なんて。何も食せらんねくてなあ、団子こしやえして一生けんめいこしやえで、塩梅あんばい見してみっかと思つて、ちよつと食つたればよ、

そしたら熱くて熱くて、しょうないげんでも、そのうちお姑さま来たずも。ちょえっと分かんねもんだから、

「その、おつかさ、あそのこの山、何の山だべ」
て言うたど。そしたら、

「あれはへアツツさまさず、のど焼け団子山だ」
て言うたど、そのお姑さまがよ。嫁さまは、

「ああ、おら家の方の山のへアテヅキ山」に似た山だなあ」
て言うたど。

(平井とよ)

19 南の山の馬鹿聾話 屏風と枕

御祝儀の晩げによ、向うから来て、お客さまいっぱい泊るもんだから、六枚屏風立てて見せだんだど。こんど箱枕して聾ば寝せだど。そしたら夜中に何だかバ

ダバダていうから行ってみたら、お客さまみんな、屏風ぐにやぐにやなつてだのを、そいつを平らにして立てるべとしていてもんだ。んだから平らになつてバダンバダンと倒れんのだ。

箱枕してた馬鹿髻は、頭そつから落ちて頭いにくすつと悪いがらつて、頭さ枕結つけていた。

(平井とよ)

20 南の山の馬鹿髻話 白禿餅

馬鹿髻がよ、嫁の実家に行ったら、一生けんめいで、うまい餅食せつかと思つていたどき、子ども来て、そして、

「何か食う」なて、お料理しつたどき来て言うのだ。そしたら

「こいつ、恐つかないから食^かんねぞ、恐つかないから食^かんねぞ」

て言うた。そしたらこんど、

「何一番好きであつた」て、馬鹿聲さ言つたそうだ。馬鹿聲は、

「牡丹餅好きだ」

ていうから、牡丹餅、一生けんめいに作つて食せて、

「こんどは何餅ええ」て聞いたら、その餅には手出さねがったど。恐つかないと言うてだらだべ。

「そんがえに何も食ねごんだら、こいつ家さ持つて行つて、みんなさ食せるように」

て、苞とコさ入つて呉けらつじやど。そしたらコーモリの先はつばさ、その苞さげて、恐つかなくて恐つかなくて、見い見い行つたげんど、こんど途中まで来たらば、その苞コ、ひっぱだきつけたど。そしたら餅白くなつたど。その餅がよ、

「この畜生、白っぱげで」

て、またみな餅そつちやこつちやひっぱだきつけて、みな食んねぐしたど。

(平井とよ)

21 南の山の馬鹿聲話 客の魚

お客さまさお魚出したど。子ども、そいつ食いたくていたもんだから、

「お客さま残したら食せつから」

て言うたど。お客さまさお魚出したら、表側食って裏返ししたど。そしたら子どもが、

「お客さま、かげひっくり返したどら」

て言うたど。んだから、子供おぼこさ決してそういうこと言うもんでないど。

(平井とよ)

22 鶯言葉

娘が嫁に行くので、母親が教えたど。

「あっちの家さ行ったら、言葉はええぐ使わんなねぞ。何でも〈お〉つけんなねぞ」

て教えてやったど。その家さ行ったら、流しの隙間から風吹いて来たら、オスリコギがオカタンオカタンで動いてる」

て言うたど。

「そがえに言葉すねたて、ええから、いま少しぞんざいだってええ」

て言うたど。そのうちお父さんのオトガイに御飯粒ついだど。そしたら、

「ヤジ、ドガエさ、カユ、クツツイタ」

て言うたど。

(平井とよ)

23 和尚と小僧

いつも和尚さま、法事になど行くと、いつでも貰って来たな、小僧さ食せねで

自分ばり食つてだど。そしたら、どっか水飴届いたど。その飴、カメさ入つて、そしてそのカメを隠したんだな。またツボは、

「こいつ、家の宝物だから、決して、ぶくさねようにすんなね」

て言わつたの、水飴は自分ばりなめて、

「お前だ食うど、毒だから、食んねぞ」ていたもんだど。

ある日、和尚さま、法事に招ばつて行ったらよ、そしたら小僧味つけて、水飴食つていたんだけど。うまくてうまくて、こんどは皆食つてしまつたど。そしてええこと味つけツボ、ぼっこして泣いったらば、和尚さま歸つて来て、「何した」て言わつじやら、

「いや、和尚さま、一番大事なツボ、ぼっこしてしまつて、なじよしてお詫びしたらええか分かんねくて、なじよしてお詫びしたらええか分かんなくて、和尚さま、こいつ食うど死ぬと言うから、一生けんめい食つたげんど、さっぱり死なねから、なじよしたらええか分かんねがら泣いっだ」

て言うたど。そしてとうとう和尚さまも仕様なくてはあ、小僧に負けたづうご

んだごでな。

(平井とよ)

24 和尚と小僧

檀家で、何しても敵わなくて、和尚さま、橋渡んなね。そうしねど行かんね家だったど。

「和尚さま、どうか、何時何時にござって、お経上げておくやい」
て言うたば、そこさ建札しつたど。そうすつど、和尚さま、真中通って行きやつた。そして中さ行って、着いて、そしてお経詠むべと思つたら、

「和尚さま、橋のどこに建札ないがったべか」
て聞いたど。そしたら

「あそこに建札あつたな、あの札はへこの端は渡るべからず」と書いてあつたら、真中通つてきた」て言うたど。

(平井とよ)

25 佐兵ばなし

むかしあつたけずまなあ。

あつちの御領、和田の方に、佐兵という人だったけど。そうしてこの人は、頭ええくてなあ、まいどこっちのおら方ほうのお殿さまの方で、何かえ、物ないもんだから、佐兵というな、面白いこと語って、銭とりなどしたんだど。

そうしてある日のこと、車さ小便桶、新しい桶さ、小便いっぱいつめで、ほうして引張つて来たど。ほしたば、関所のどこまで来たば、お役人さま、

「こらこら、佐兵、にさ、何持つて来た」

「小便だつす」

「また嘘うそばり語って、この野郎、何かで銭もうけするつもりだな、こりや」

「ほんね、お役人さま、本当に小便せうべんだぜつす、こいつなの」

ほうしたば、お役人、こりやおかしいと思つて、

「佐兵、そこよけろ、おれ調べてみる」

佐兵は、

「いや、ほんねず、お役人さま、そいつなの小便だから、ほげなすねでおくやい」
て言うたど。ほうして言うたば、お役人はコンコンなて、ダンボ抜いてみたら
ば、本当に小便だったど。

「ほりや見ろ、お役人さま、おれ嘘語んめえちやえ」

そしてずうっと引っぱって行つたど。そしてはあ、その小便など投げで、また
カランコロンで引っぱって来たど。そうしてまた次の日、また小便桶新しいな引っ
ぱって、

「どうか通しておくやい」

「どさ行く」

「米沢の城下さ行くつし」

「また何つけてきた」

「酒だつし、こんどは酒つめてきたどこだつし」
て言うた。したば、お役人さま、

「また、この野郎、人のどこ嘘語ってダマカス気だな。ズフタレばり語って、この野郎」

て言うたど。ほうしたれば、

「ほんねず、本当だず、酒だつす」

て言うげんども、お役人さま、

「ズフタレ野郎、にさ、見ねったてええから、行げ」

て言わっじやど。佐兵、うれしがって、

「お役人さま、おれにだまつさっじやも知しやねで……」

ほうして、はいつ城下さ持つて行つて錢もうけしたど。佐兵なんていう野郎、そんげなもんで、そげなことばかりして、頭のええ野郎だったなあ。ありやあ。どーびんと。

(佐藤七右衛門)

26 吾平ばなし

お羽黒さまの下に、吾平ていうないだど。かいつあ仲々才走つて、頭のええ野郎コでな、そしてある日のこと、竹筒たけづぼ持つて、お羽黒さまの天辺から、

「見える、見える。あらら……城下に牡丹餅だのアンビンだの、いっぱい並んだの見える。こっちの方見てみつか」

そうして、吾平、そげなこと言うならば、天狗さまがお羽黒の方から、

「吾平、吾平、何見つだ」

したら、吾平は知しやねふりして、

「いや、見える、見える」て言うたもんだど。天狗さま、

「見せろず、吾平」

「ほんじやらば、天狗さま、どこにいたか分んねもの、隠れミノと隠れガサ、おれちや貸せ、そうすつどこの天眼鏡見せつから」

そしたば、天狗さま、「ほら」て言うたもんだから、吾平、そいつ着て、べんべ

んと走って逃げて行ってしまった。

そうすつど天狗さま、天眼鏡見たげんど、さっぱり見えね。竹筒ばりだも。

「吾平の野郎、おれのどこでしたな。よし、仇とつて呉んなね」

そして、吾平はがらがらと隠れミノと隠れガサもつて、こんどはお菓子屋さ行つて、アンビンを盗つて、酒屋さ行つて酒を盗つたり、そしてそれからコマジメだの、うまいものあつちこつちから、豆ねじり、そんがえなものまで盗つてきて食つたど。そして今度、雨降りの日、また泥棒に行つて、そして何かええ宝物だの、うまいもののだの盗つてきたつた。隠れミノと隠れガサ濡つだもんだから、吾平は火棚さそいつ干していたば、あんまりた火焚いたもんだから、隠れミノと隠れガサ、燃えてしまつて、吾平はなくなつたもんだから、そいつの灰で裸になつて身成りさ塗ぬだぐつて、またうまいもののだの盗りに行つたど。そしてこんど、④の酒屋さ行つて酒倉さ入つた。そして酒呑んだもんだから、眠ぶたくてねだ。ほうしたれば、寝小便して、夜中に目覚ましたば、たっじやもんだから、チョンチョコのどこ灰、ずうつと落ちた。ほうすつどそいつ知しやねで、またそこら歩いったら

ば、

「チョンチョコの化けものだあ」

なて、して、棒持^{たが}って、野郎コべら、みんなに追っかけらつで、捕えらつで、そうして水ぶっかけらつじやれば、吾平だつたもんだから、こんどはみんなにせめらつじや。んだから悪れごどざあさんねごんだごで。とーびんと。

(佐藤七右衛門)

27 大黒さま

お大黒さまというのは、決して上を見ない人だそうだな。大きな頭巾かぶつて、一生けんめい働くことばかり考えてたもんだど。そうすつど、みんなから妬^{しよ}ねまっで、ある集会で餅搗いて食ったときだそうだ。そんな時、お大黒さまは砂糖餅大好きで食ったのさ、隣の人は、

「いや、いまつとオダチする」

こんどこっちの人も、「いまちつとオダチする」て、みな組んで、そうしてさんざんに食せだそうだな。そうすど、こんどは目、暗くなるみたいな氣持になったそうだな。そして家さやつと来るようにして来たところあ、途中である女の人が川端で大根洗いしていたど。そうしたところあ、

「大根ゆずつて呉れねえか」

て言うたところだど。大根おろし食^くだくてな。そしたところあ、

「奥さま、勘定したたべもな」

こう、女の人あ言うたど。そうすつど、

「いや、ほんじゃ、仕様ない」

て言うたものの、女中が股大根見つけだずもな。

「こいつは二本に勘定しておかねえべから」

て、半分切つて、お大黒さまさ呉れたそうだ。その大根で助かった、餅食いすぎて。んだからお大黒さまさは股大根上げるんだど。どんびんと。(佐藤七右衛門)

28 酒 吞 童 子

大江山に悪い鬼がいて、一に頼光、二に渡辺、三に定光、四に末武、五に保昌、六に金時で、六人で山伏姿になって、お酒いっぱい持^たって行^くて、野越え山越え行^くて、向こうさ行^くて、「一夜の宿を貸してくれ」て言^うたら、向うでは喜んで、「ええ鴨来た」^{と思}って、「ほんじゃ、一晚泊めてやる」^なて、持^って行^った酒、「ええ酒だから……」^なて御馳走したば喜んで飲^んではあ、寝てしま^った。そこで頼光たちがみんな退治したど。

(平井とよ)

29 狐 の は な し

ネコゴ(地名)の一郎サがずうつと法事に行^っての帰^りだったか、御祝儀さ行^っての帰^りだべが、お分けの苞コ背負^って、いっぱい機嫌で来^たところ^が、焼場の

とこずうつと来たば、ええ女出て来て、待遇して酒吞ませらつて、一風呂浴びろ
なて言わつて、そのお分け置いて、その風呂さ入って、

「いや、ええオカシだ」

なて。覚えて見たらば溜桶だったなていう話だったど。

(平井とよ)

30 青

鬼

焼場のどこずうつと上がつて来たらば、鉢巻した青い鬼あ、人食いしたたけ
ど。焼けた人をな。したば、魂消て逃げて来た。

角力とりが、「そんげなことあんまえちやえ」なて行つて見たば、焼場の番人が
夜中ごろ、燃えてから団子焙りして、あんまり顔面熱いので、葉芋の葉っぱで口
と目だけあけて、そしてねじり鉢巻して、その団子焙つて食つてたのだけど。

(平井とよ)

31 沼の平

奎^{もく}の沢に「沼の平」というところある。今は田んぼになっていつけんども、昔は沼だった。そしてその沼さ毎日々々雨降って、何十日とかの雨降りだった。そう。そして困って困って、石なのゴロンゴロンと流つて来る。その沼には蛇がいて、三日三晩の水増し上がって、そして蛇を退治する勘定で、金棒といで、そこさ投げこんだら、蛇がいなくなつて雨も止まつたという話がある。（後藤）

32 八幡太郎のうれしや沢

八幡太郎義家が安部貞任と戦つて敗けそうになつて、ここの「うれしや沢」にかくれた。そこで家々を探したげんど、どこにもいね。そんな時、八幡太郎はそこにあつた大きな漆の木の太いのに、中が洞になつていたのがあつて、その中に

入っていたら、その入口にクモの巣がすくって、敵がタイマツかざして来たげん
ど、入口にクモの巣あったもんだから、「入口にクモの巣はっているんだから、人
が中に入るはずはない」て言うて、難をのがれたもんだから、「うれしい、うれし
い」と言うて、「うれしや沢」ということになったんだど。

（後藤）

33 時庭の六本仏

生れは四国の琴平さまの近くで、漁師であつた人で、何か男の持つてるものが
あまり大きすぎて、誰さも通用するものがなかつたど。そういうわけで、他人に
あまり馬鹿にされるもんだから、六部になつて日本全国廻るということど、六部
になつて出かけて来たつてよ。

そしてずうつと奥羽に入つて来た當時は、何でもこの辺は湖で、やつと水が乾
いたばかりで、今泉に抜けるところに、「金売り吉次道」という道あつて、東山

から山の上通って、今の長井の川井に出る道だ。あそこに「踏切り不動」が立ってで、踏切ってあそこから水流したということで、そこが渡し場だったらしい。義経が弁慶を連れて、頼朝と仲悪くなつて、岩手の衣川さ来つ時は、金売り吉次が道案内して連れて来たというどこなんだな。

それから歌丸（長井市）まで来て、寺さ行つて願ったところが、何さ寺さあつて、寺に泊めらんねがったらしく、そんで出てきてから川端で、女の人が何か洗いのしていただ。そこさ来て、六部がこういうわけだから泊めて頂かんねべかと言うど、

「実は、おら家の人と二人ばりで生活していんだ。んだげんども、今、家の人には伊勢参宮に行っていないごんだ。多分今日か明日あたり、伊勢かける日だと思うげんども、別に家には何もなければ、道中災難に会わないように、拝申して呉つこんだらば、泊めて上げっこでな」

て言うたど。そうしたら、

「いや、おれ、そいつ商売だから、立派にお経上げてけっから……」

て、そして、「ほんじゃらば」ていうわけで寄せて御馳走してお経上げてもらつて、御飯食べて、さまさまお茶飲んで話したところが、

「おれは、こういうわけで六部になつて来たんだ」

て言うもんだから、それはどうも人間として残念なことだな、人間の味合いていうのはないはずだ。情けないことだ。おれあ、何とかしてさせい上げたいと言うわけだったど。そうすつど、六部は喜んで、次の日立つて行つたど。

ずうつと国に帰るとき、舟の中で一緒になつた人たちでみんな話して、

「自分自分で嬉しがつたこととか、ごしやげたこととか、魂消たこと、ええかつたことあんべから、そういうことをお互いに語り合つてみんべ」

ていうことになつて、その六部が奥羽でこういうことあつたということ話したど。ところが拍子わるく、その舟さ女の亭主ものつてだったど。そして名前まではつきり言わつじやもんだから、帰つてくるよりも早く家さ寄つて酒瓶ササ四杯で一升だったが、

「一升入れのスズき、五杯買つてこい」

「なえだごど、四杯しか入んねスズさ、五杯買つて来いざあ、そがえ無茶なこと語つたて仕様ない」

こういう風に言うたど。

「何語つている、きさま、入れ方上手だそうだ、他人、^{ひと}誰も入れらんね物、お前
は入れられるそうだから、四杯入れるスズさ五杯入れるの何でもないごで」

そうすつど、「おれのことバレた」と、こう言つて、そつから黙つて立つて裸足
で川さ入つて死んでしまつたていうんだな。そしてからまた何年か経つた時、そ
の六部が廻つてきて、顔だけでも見たいと思つて通つた時、その家に別な女がい
た。そしてその女に聞いたところが、

「そいつは、こういうわけで、川さ入つて死んだ。おれはそんでここさ嫁に來た
んだ」

こういうこと言わつじや。そうすつどその六部は、

「ほんじや、おれ殺したんだ。六部なて言われるなて申訳ない」

て、それから自分が苦勞してその六部は、細越さ行つて、石仏を注文したとい

うんだな。そしてそれを背負ったわけだな。自分で背負って、昼間だと人の目につくから、夜、背負ったど。一体、仏というのは七本あるの、六本立てて、七本目、お仏ほとけ（漆山）まで来たところが、動がんねぐなった、疲れて。そしてそのどこさ休んだら、休んでるに従ってなおさら疲れが出てきて、動かんねぐなつて、そしてるうちに夜明けて明るくなりかかって来たど。こんじゃ、これはここさ置く他ないて、そこさ置いて、沢に入つて、この沢で死んだので、そこを六部塔婆というし、時庭には六本仏しかなくて、一本はお仏にある。

（後藤）

池黒付近の伝説私考

佐藤 圭芳

（付）佐藤七右衛門氏（圭芳）が『宮内文化史資料』の、第四、五、六、七集に寄稿された「池黒付近の伝説私考」を、著者の了解を得て、伝説の部分だけ掲載することにした。この稿のために、特に小川弘氏に御配慮いただいた。

1 謎のうたよみ

「あさひさす ゆうひかがやく みつまたこうずのその下に あらくわせんちよ
う すせんばい」

昔々の大昔、この辺一帯を支配する大長者様がおって、千丁の新鍬、千杯の朱を、ある所に藏つてあるとの意味で、その場所は朝日のさし、夕日のうける三また小路、ある人はみつまたのこうぞの木ともいい、その下であるという。

別所の松丸法師が馬のひずめに朱がついて来たとして、人を使って松の木を掘り返したり、あちこちさがしたが、宝はどうとう出てこなかったという。

2 池黒の地名と馬頭観音

池黒畑中、東はネコゴの所に、馬頭観音様が鎮座している。その前庭に約五、

六坪湧水の池がある。その池から義経公の乗馬が出生し、故に池川村だった村名が池より黒馬出生という訳で池黒村となったという。

何百年の前の大雪の四月のある日、ネコゴ屋敷の前庭に、ひょうかな黒馬の仔が立っていた。この馬は誰も飼い手がないので、ネコゴの家で飼うことにした。

不思議なことにこの黒馬は厩を自由に出入し、甘酒が大すきで、屋根をかけ上がり、天に向っていななき、または水中を自在にかけて水浴もした。この毛並のピカピカ光る名馬は一体どこから来たのであろうかと太評判であったが、程なくして、西方の原っぱ場川岸に、馬の形をした池が忽然と現出し、清水がコンコン湧いているのを村人が発見し、あの名馬はここから生れたのだと信じて馬頭観音を勧請し、盛大に祠った。また池の水は病馬によく効き、池のはたにある木は人の病気や、のどにささったトゲまでとれるといわれている。

さて、このような名馬の評判を伝え聞いた義経公が、その臣弁慶、亀の両名を名代に遣わし、この名馬を手に入れられ、これが後に名馬するすみとなり、あの目ざましい働きをしたと伝えられる。「ろくしやみようじんさんけいのみぎり、

じようめ一とう……言々、亀井新十郎、弁慶」の古証文を残したと伝えられるが、現在はなく調べるすべはないが、羽黒旧参道に亀井橋等のゆかりの名もあり、佐藤の一族は今もなお黒馬を飼う事はタブーとされている。

3 三塚の(一) 備後塚(首塚)

明治の中々末期、漆山大仏の東方四百メートルに上横打という地点が(俗に備後塚といわれる)田の中より、漆塗りの棺が出土し、それは備後三郎の首桶だとして、大騒ぎになり、珍藏寺の碩宝和尚が引取り、御経をあげ供養したという。

三塚の(二) 経塚

大仏北方約三百米、大昔のおりはた河畔にある。

経塚とて、大昔おりはた川大洪水の時、これを防ぐためにありがたいお経をうめた所で、一字一石の写経石が明治の末頃まで拾われた。

またこれは、へび塚とて、おりはた川大洪水の時（大昔、ここを川が流れていた）この塚の西の方が一大湧となり、たまげるような大へびが何百匹となくここに打上げられ死んだので、ここに葬ったという。

4 大木大明神

池黒上の川合輝男氏所有の地に高さ三尺九寸、巾中間で一尺五寸、自然石に一寸手を加えた石塔が南面して建っている。表面に大きく「大木大明神」文化十二

乙亥七月大明神と陰刻されてある。

昔、この地に櫨の大木あり、枝々繁茂し約五反歩にまたがり、昼なおうす暗く、主幹下部洞を生じ、優に五人は入れる穴ありて、博徒よくこの中にて開帳せしという。またその大木の実、西風に飛び、お羽黒山斜面に自生するけやき、みなこの子孫なりと。

5 鶴布山珍藏寺

昔々、おりはた川のほとり二井山に、金蔵と申す正直者が住んでいました。宮内の町へ出た帰り道、池黒で若者が鶴を一羽しばっていじめていました。金蔵はあわれに思い、有金をはたいてその鶴を買い求め、なわをほどき放してやりました。鶴はよろこんで大空を舞い舞い、どこかへ飛んで行ってしまいました。

やがてその夜、金蔵の家にすぐきれいな女が現われて、私をあなたの妻にし

て下さい。何か働かせてください。と何べん断つてもかえらないので、仕方なく置くことにしました。その女は織が上手で、おった布は非常に高く売れました。

ある日のこと、女が「旦那さま、私は御恩返しに或るものをあげますから、七日の間、決して私の部屋をのぞかないでください」といって、その日からはなれにこもったきり、夜も昼も、コットンコットンという音が続きました。

七日目の夜の事、金蔵は待ち切れずに、一体何をおっているのかと忍び足にて、はなれに近寄り窓のすきから中をのぞきました。とたんに金蔵はあまりの恐ろしさに、「あつ」と声を出しました。それもそのはず、織をおっているのは女に非らず、やせおとろえた一羽の鶴が、己が羽毛をむしり取っては織り、むしり取っては織り、すではだかになっているではありませんか。金蔵の叫び声に、織りは止まり、その羽毛のない鶴は淋しくいいました。

「旦那さま、なぜ見ないでくださいといった私の言葉をお破りになったのですか。私は御覧の通り、人間ではありません。実はこの間あなたに助けられた鶴でございます。私がいま織っているのは、御恩返しに私の毛で作った（おまんだら）で

す。これが私の片身でございます。……さようなら」

とて消えてなくなりました。後、金蔵は感ずるところありて僧となりました。

それで金蔵寺であつた寺が、その宝物の名をとり、鶴布山珍藏寺と改め称したと申します。

また金蔵が助けたのは、つるはつるでも、つると申す京あたりの女織師で、それが尊いおまんだらを織つたという説もある。

6 六部塔婆

漆山の沢入り、山神様の旧参道の手前、多勢吉次郎氏所有山林小杉の中に、南面の一石碑が大きな台座石の上に立っている。

物語りは、修験盛んなりし昔、三山詣の六部がこの地に於て、賊に殺害金品を略奪され、倒れていたの、ここに葬り、その六部の霊を供養するため一塔を建

立したという。(延享五戌辰三月の銘あり)

7 羽黒神社と上杉の封じ道

池黒^{かみ}上の平、現在の元羽黒に鎮座し給うお羽黒様は、それはそれはの荒神様で修験盛んなりし昔から近郷近在信仰の中心であつたという。

戦国の昔、ある日御領主景勝公が、西の方から初めて御通りあり、池黒亀井橋付近に差しかかると、乗馬何としたるか、ひざまずいて動かなくなったという。一同只畏れおののきなすところを知らず、時に馬上の景勝公、羽黒様の方をにらみつけ、「よくきけ、羽黒、上杉の羽黒か、羽黒の上杉か、返答せい」と大音声。不思議や乗馬忽ち動き出した。この事以来、その参道は後領主の命に依り、封じ道として通行止めになつて御維新に及んだと伝え語り継がれている池黒の物語りである。

8 大仏の板碑

何百年か大昔、一人の六部が吹雪に行き暮れて息も絶えだえ、凍死せんばかり、大仏の住家に一夜の宿を求めた。家人は茄子火をたき、そばから湯で体を温めたり、親身も及ばぬ情愛の看護により六部はようやく蘇生した。後しばらく滞在したが、身分の高い六部とあって、付近の民家を教化し、やがてそこを去った。

後何年かして六部が再び大仏を訪れたが、その時にはもう彼の家人は此の世の人ではなかった。六部は為に、一塔を建立し、その霊を供養したという。

又伝える所の裏話は、大仏の祖先が伊勢参宮の帰り道、宇都宮辺の宿屋で一人の六部に出会った。その六部の語るに「出羽国三山詣での行脚の際、大仏辺で吹雪に行き暮れ凍死すべき所をかくかく待遇を受け救われたと得々と吹聴した。何を感じたか先祖の方は大急ぎで帰宅するや、大徳利を家人に突出し、これに二本分の酒を買ってこいと命じた。家人はそのまま帰らずこの世に無かった。後伝え聞いた六部は、為に一塔を建立してその霊を供養したという。

（大仏手塚久右衛門氏墓）

9 藤本家板碑

昭和三十一年、近所の北野邸東の川より（橋として架けてあったもの）要氏が堀り上げ、墨書の種子キリークが川の字の如く見えたるにより信仰心厚い藤本氏はこれを火伏せの神として自宅に祀り申した。

10 永仁の碑

何百年かの大昔、この地に曾我の大雨が七日七晩降り続き、大洪水になって、河は氾濫し、田畑は押し流され、百姓の困難その極に達した。その時池黒三右衛門の祖甚五郎とも申しますが、この雨は曾我兄弟の一念がこもって涙雨となったのであるから、御供養申さねばなるまいとて、高台の地を選び碑を建立し、お祀り申し上げたと伝えられる。後年旱時には雨乞の神としてお祀りされたという。

相並ぶ碑のうち右を十郎祐成、左を五郎時政とて今もなお先祖が建立したと伝えられる。中堀方にて代々供養が続けられている。

11 三 堀 観 音

池黒矢ノ目観音の森に置賜第二十七番池黒札所の観音が建っている。

時の領主景勝公、上方に於て何のはずみか、領内の鶴を捕えて献上することになった。主命は遠く米沢に伝えられた。しかしどうしたことかその時に限って鶴は一羽も姿を見せなかった。献上の期日は迫るし、まだかまだかの上方の領主の催促に国家老ただ氣をもむのみだった。昔から鶴がすんでいるという池黒（それでその地名鶴群田つるまきだと称すると言う）にも狩人を派遣。靈験あらたかな三堀観音へ大願はかけられた。やがて満願の日に、験ありて鶴を押える事ができ、上方に之を送り、面目を保つことができたという。よって領主様より御墨付をちょうだい

し、今尚その宝物は現存するという。

藤原時代の造顕であり、行基菩薩御作五観音は近世まで付近の幼児自由に本堂に出入し、本尊とたわむれ、抱きかかえて水浴させたりなどしてあそぶ風習もあつたと古老は語り、民家にとけこんだ信仰のあらわれである。

12 梨 郷 江

大昔、池黒のたての殿様と、梨郷のたての殿様が賭け碁をした。かねてから領内水不足になやむ梨郷の殿様は、己の奥方をかけ、池黒の殿様には織棧川の全水量の三分の一をかけしめた。場所はお寺様とかで差し争い、遂に運命の決するところ水を失った。

第二部 大道寺重栄翁昔話 その二

—長井市五十川—

1 人身供養 —蛇の精—

むかしあつたけど。

あるところになあ、おじいさんとおばあさんといだっけど。そうしてなあ、二人の間に可愛い女の子があつたけど。そうしてその女の子は「お花さん」という名をつけたど。おじいさんもおばあさんも、その女の子がかわいいくて、「お花や、お花や」と言つて、大事に大事に育てていたけど。またその女の子も、大そうな親孝行で、「おじいちゃん、おばあちゃん」と言つて、台所、何でもしてだんだん大きくなつて行つたど。そうして美しい娘になつて村の評判のええ娘になつたど。このおじいさんもおばあさんも年とつてから持った子どもなもんだつたど。

その村には昔から人身御供というものがあつたけど。その村は高い深い山の麓

にある村で、その山の奥の岩穴には荒神が住んでいらした。その荒神が怒るとその村では米も野菜もだいなしになって何一つ収穫なのさんねくて、大勢の人は食うものがなくなつて、たいそう困るので、その荒神に怒られないように五年に一ぺん、人身供養ささげて、荒神を鎮めておつた。その人身供養に當つた家では、大事な大事な娘ざかりの娘でも、村のために捧げ、親子は生き別れをしなければならぬが、親は大事に育てて来たかわいいわが子を、また娘は年寄り親と別れ、自分の身をいけにえにして供養に立たなければならぬが、そのことも悲しい運命ではあるけれども、これは人のためであるというあきらめで、そういう者を立てておつた。

さて、ところが、その人身供養の白羽の矢は、今年はそのお花さんに立った。白羽の矢は不幸にもお花さんの屋根に立った。おじいさんもおばあさんも大そう悲しんで、お花さんも一度はがつくりしておばあさんにすがつて泣いだけれども、お花さんはちゃんと覚悟を決めて、供養に立つ心構えをした。

ある山の中で、あるとき、ある二人の若衆が山奥の峠の道で出会つた。そうし

てなあ、二人はいろいろなお話をして、にわかには仲よしになったごんたど。そして二人はお互いに打開け話をしたど。そのうちの一人の言うには、

「実は、おれは世の中で一番恐いのは錢だ。錢ほど恐いものはない」

こういう風に言った。と、一人の者は、

「いや、おれはこの世の中で一番恐いのは煙草だ。この話はお互いに内緒だぞ、決して他にもらしたりはしないこと」

という風に誓い合つて別れたど。してその〈錢が恐い〉て言うた者が家に帰つてから考えてみつど、

「ああ、あの奴は煙草に困るて言うた。ありや、きつと煙草ではなくて、煙草のヤニでないか、ヤニが嫌いだどすつこんだらば、ひよつとすつど荒神だと言つて村人が恐れている、ありや蛇のせいではないか、たしかにそりや、相違ない」

こういう風に、その若者が考えたど。そんでその若者は隣村に出かけて行つて、村の人に話をして村中の人のキセルからヤニを皆集めた。

そうして山奥に持つて行つてヤニを岩穴から山一面に撒きちらした。そうすつ

ど、その荒神であるところの大蛇はどうとうその山に住むことができなくなつて遠いどこに逃がれてしまった。そしてその蛇の若者は、

「約束を守らねえで、あの野郎はきつとおれのことを語つたに相違ない、よしこんどは仇とりに、あの奴に錢を一つ、おれは持つて行つて、仇とつて呉^けんべ」

と、こういうわけだ。そしてこんどは、蛇の精であるところの、その若者は、どつさり錢を持つて行つて、その村の若者の家さ、ドスンと投げ込んだ。ところが何とその若者は大当りしたずだ。ほうして一ぺんに大金持になつて、また一方では山の村の荒神が退治さつじやんだし、お花さんは人身供養にならなくともよくなつて、おじいさんもおばあさんもまた、大そう仕合せに暮すことができ、またその若者も思いがけない金持になつたど。めでたしめでたし。どうびんと。

2 果てなし話

ほら、大きな蛇が木の孔にいだったけど。ほうして、ほっから出はってきただ。今日ものろのろ、明日ものろのろ、今日ものろのろ、明日ものろのろ。

3 蛇と娘（蛇簪）

むかしあつたけど。

あるところになあ、おじいさんとおばあさんといだっけど。そうしてなあ、春子さんという可愛い子どももいで、三人で水いらずの、楽しい、そして仕合せに暮らしていだっけど。かわいくてかわいくて、春子さんば大事に大事に育ててきたんだけど。春子さんもまた風邪もひかねで大きくなってよ、今では年も十八才、美しい娘さんになったど。そうして、「おばあさん、おじいさん」と、孝行なやさ

しい女の子になっていた。そうしているうちに、ふとしたことから熱を出して春子さんは寝込んでしまった。おじいさんもおばあさんも大そう心配してよはあ、かわるがわる一生けんめいに介抱した。そのために熱だけは下がった。んだげんども、それから何となく春子さんも元気がなくなつてよ、さびしげな顔をしているようになった。

そうして前のように食欲もなく美しい体もだんだんやせてよはあ、細々となるばかりで顔の血の色もだんだんよくなるばかりだった。おじいさんもおばあさんも、ひとかたならず心配して神さまや仏さまにお詣りしたり、医者からはええ薬をもらつて来たりして、うまいもの買つてきて食べさせたりして、いろいろに介抱してみた。

そうしているうちに、ある日、おじいさんは山の仕事のためによ、山奥の方まで出かけて仕事をしておると、にわか雨に会つた。おじいさんは仕方なしにそこらにある洞穴に入つて休んでいた。そうしてなあ、いるうちにその岩穴の奥の方からひそひそと話声がして来た。おじいさんの入っていたその奥ずっと深い

穴があつたわけだな。

「その穴の奥に誰かがいだんだなあ、こりや」

と思つて、聞くずもなく聞いていっど、その話はどうも意外なお話で、誰か二人で話しをしている様子で、だんだん聞いているうちに、どうやら家の春子のこのように思われるんだ。そうしてなあ、その話の主は、

「実は夜になつど、春子さんのどこに忍び寄つて、八匹の蛇の子を宿してしまつた。ほだげんども、人間さまは、なかなか利巧なもんで、もしその春子さんのお腹の中に蛇の子が入つたということが分かれれば、かならず菖蒲の湯さ入つこで。いや、そうされつど実はその蛇の子も死んでしまう」

聞くともなく聞いていっど、そんなことのようにだと。

「いや、これは大変だ、とんだ話を聞いたもんだ」

と、おじいさんは驚いてしまつて、「これは大へんだ」というので、岩穴の話しの主は、この山の、確か主である蛇に相違ないと思つた。そうしてこつそり気付かれぬように、穴を逃がれて家さ帰つて来たど。そうしてよ、おばあさんにその

話をして、相談して、春子をとにかく菖蒲の湯さ入れた方ええではないか。してさっそくおじいさんは、川のほとりさ行つて、菖蒲を探して取つて、風呂に入れて菖蒲湯をわかし、そしてまず、おじいさんが入った。

「ああ、これはええ、この湯はええ、香りもええし、とても温つたまる、気持もええし、これはええ湯だ。菖蒲湯というのもええもんだ。おばあさん、お前も。

春子も入れよ」

て言うたど。そうして、その次におばあさんが入り、それから春子をすすめて入れた。そうして次の日もまたその次の日も、みんなで菖蒲湯に入っているうちに、春子さんは、お腹の中の蛇は死んだものか、だんだん顔色もよくなつて日まに晴れやかになって、元の通りの元気な美しい、かわいい娘になつたど。今でも五月の節句には菖蒲とヨモギの風呂に入れて、みんな入るのも、丈夫な体で、悪魔を払つて、という風習が残っているど。とーびんと。

4 桑原 — 久留島武彦から聞いた昔話 —

むかし、中国のあるところに、チョウランという女の子がおった。

そのチョウランは大そう親孝行な娘で、お母さんと二人で楽しく仕合せに暮しておった。ところがそのチョウラン、あるとき夢を見た。チョウランがすやすやと眠っている枕辺に、白髭をはやしたおじいさんが立って、その言うことには、「チョウランよ、お前はなかなか親孝行なええ娘だ、んだげんども可哀そうに、お前の前世というのは悪い人間であつた。そのためにお前は近く、雷のために殺されてしまう、可哀そうであつけんども、やむを得ない」

と言つたかと思うと、ふつとその夢は消えてしまった。

「ああ、今のは夢であつた、夢であつてくれればええが本當にわたしは殺されなければならぬのか、雷のために死ななければならぬのか」

チョウランは思った。そんなある日、どつか向うの方でゴロゴロ、ゴロゴロと雷の音がした。はるか向うの方で雷の音がしたかと思うと、だんだんその音が近

くなつてきた。そうしてこんどは自分の家の真上の方に鳴つてきた。

「ああ、今日はおれはこの雷のために殺される。仕方がない。おれは前世は悪い人なんだ」

チョウランは覚悟を決めた。そうこうしているうちに、突然に目もくらむような稲光がした。ヒカヒカ！ていった時に、チョウランは思わず戸口の戸をあけて外に飛び出した。お母さんは驚いて、

「チョウラン、どこへ行く、雷に……」

と言つたその声も何のやら、チョウランは外に飛び出した。その時に間髪を入れずにすばらしい大きい雷が鳴つた。そのためにチョウランは気絶してしまった。ほうしてチョウランが夢幻で氣を失っているうちに、また夕べの白髭のおじいさんが枕辺に立つて、

「チョウラン、お前は何というやさしい娘だ。お前は自分が殺されるということわかつて、そいつの友づれにお母さんがなりはしないかというので、お前は一人で外へ飛び出した。その心持に免じて、お前の罪は許す」

といったかと思うと、チョウランはふと目がさめた。目がさめてみると、チョウランは桑畑の中に倒れて、そうしてその桑の葉っぱのしずくがチョウランのかわいい口の中にポツリンポツリンと落ちておった。んでチョウランは目をさまして、家に帰ってきた。おかあさんは狂気のようになつて捜していたげんども、チョウランは帰つて来たのを見て、大そう喜び、また二人は仕合せに長く暮したど。それでヘクワバラ、クワバラというのは、桑原におつてこのしずくのために氣を失つたチョウランがまた人ごころがついた。そんなところから、ヘクワバラ、クワバラという語ができたのだ。

5 オタタカ鳥

兄と弟がおつて、兄を大変弟が可愛いがつて、めんどろみているどこだごでな。んだげんど、兄の方は少しひねぐれてゐるわけだ。盲目で不自由してるもんだか

ら……、で、

「おれどこさ、こんなめんどろ見てくれるし、うまいな食せて呉^ける。こげだもの弟、なんぼこれよりうまいな食つていんであんまいか」
と、根性廻して、兄はかえつてうらむ話だな。

6 かちかち山

むかしあつたけど。

あるところになあ、おじいさんとおばあさんといだつけど。今日はおじいさんは山の畑さ豆蒔きに行つたど。

一粒まいたら 千になれ

二粒まいたら 二千になれ

て、おじいさんは一生けんめいで豆まきしつたど、ところがそこさ一匹の狸あ

来た。そうして畑の片わらの大きな石さ、でちつと腰かけで、悪口言う。

一粒まいたら くっされろ

二粒まいたら かんぶれろ

というもんだから、おじいさんは最初のうちは豆まき続けっただげんど、

「なえだこの畜生」と思ったもんだから、「畜生」て言うど、狸はわらわらと逃げ
て行つて、またおじいさん、

一粒まいたら 千になれ

二粒まいたら 二千になれ

て、心こめて豆蒔きしてっど、また狸は石さ来て、腰をおろして、

一粒まいたら くっされろ

二粒まいたら かんぶれろ

て、悪口言うもんだから、おじいさんもほとほとごしやげで、

「こんじゃ、しょうない、この畜生」

て、こんど家さ行つてトリモチ持つて来たど。そうして石の上さベターツと塗っ

て、ほうしてまた知しやんぷりして豆蒔きしつたど。

一粒まいたら 千になれ

二粒まいたら 二千なれ

て蒔いっただ時、またさっきの狸あ来て、石さ腰かけた。ほうしてまた悪態語るもんだから、「ようし、こんどは」というわけで、おじいさんが立つて行つたところあ、尻、石さベダーツとひつついっただもんだから、狸のやつは逃げらんねくて、おじいさんにととう捕つてしまつた。と、おじいさんが、今度はその狸、家さ持つて来て、縄でがんにがらめにして梁の上さつるしつた。逆さに吊るさつて、狸は……。

その下でおばあさんが粉はたきしつた、トンカパンカ、トンカパンカなてよ。

「ばば、ばば、何て言うたて、この狸なえて言うたて、決して縄など解いで呉^けだり、下さおろして呉^けだりなどしんなよ、晚^けげ早く来て、このタヌキ、あんまりごしやげっから殺して狸汁して食うなだから、婆さんさ決して縄など手掛けんなよ」
て、おじいさんが固くことわつて、また豆蒔きに行つた。ほうして山の畑さ行つ

て豆蒔いった時、おばあさんがまた粉はたきして、トンカパンカ、トンカパンカ。そうすつど狸は手足縛らつでいるもんだから、痛だくて、なかなかこたえらんねくて、

「おばあさん、おばあさん、おれ、その粉はたき助^すけつか、手伝つて呉^けつか」

「いやいや、ええて、ええて、おじいさんに決してそんげなことすんなて言わつじやも」

なて、おばあさんが聞かない。

「あのよ、おばあさん、あばあさん、なかなかええおばあさんなもんだもね、んだからちいと、この縄ゆるめて呉^けんねか」

「いやいや、さんねて、さんねて、おじいさんに、おんつあれるからさんねなだ」
「ちいと、ゆるめて呉^くたら、ええがんべした」

いや、あんまりしつこく言うもんだから、おばあさんも人ええもんだから、ちいとゆるめて呉^くつじやど。

「ああ、ええごど、ええごど。おばあさんありがとう。いまちいとゆるめて呉^くろ、

おばあさん」

「いや、そがえすっじど、落ちて来つど悪れがら、さんね」

「決して悪れごどしねから、こうしてじつとしていつから、ええごで。手も足も痛くて仕様ないから、ゆるめて呉^けろじ、ちいとでええから」

て、またしつこく言うもんだから、おばあさんがまたちいとゆるめたずも。そうすつど、狸の奴はバダバタとやったもんだから、縄からほどけて下さ落つで、おばあさんが魂消て「あつ」て言う間に、狸はこんどおばあさんの持つてだ杵でふり上げて、そうしておばあさんどこ打ちのめして殺してしまつたど。それのみならず、おばあさんを表さ引ずり出して、自分がこんどおばあさんに化けて粉はたきしつたど。そうこうしているうちに、だんだん晩方になっておじいさんが帰つて来た。

「ばんば、ばんば、今来たどこだ。狸なじよしつた」

「あのよ、おじいさん、狸などどつくにはあ料理して狸汁して待ちつたどこだはあ」

「なにごどだごど。おばあさん、お前一人でしたながはあ」

「んだごではあ」

なて、狸あおばあさんに化けたのも知しやねで、おじいさんも、

「ほんじゃ、一つ御馳走になっか」

なて、足洗つて寄つてお膳さ向つたど。ちようどそこさ兎あ来たずも。ほうすつど、そこさ狸あいたもんだから、兎見つど分かんべ、おじいさんが見ればおばあさんに見えつかも知んねげんども、兎見つど狸だもな。「狸いた」て言うもんだから、おじいさんがびつくりしぎようてんして、狸はこんど、「ざまあ見ろ」て言うけずあ、てんてんと逃げて行つてしまつたはあ。

「いや、こりや、こりやなえだごどまず、狸汁したなて言うけ」

て思つて、おじいさんが表さ出はつて見たところが、とつくにおばあさんが殺さつて、狸がおばあさんに化けつたなずもなあ。ほうすつど、おじいさんがオエンオエンと泣いてよ。ところがそこさ来た兎は、こんどおじいさんをなぐさめて、「おじいさん、おじいさん、そがえに泣かねでええでねえか、おれは一つ身代り

になって、その狸を退治してけんべ、まず泣くな止めで、二人で相談すんべ」

て言わっでおじいさん、はしめて我にかえって、兎と一緒に物語りはじめた。

ほうして兎はこんどおじいさんと相談して、何とかしてあの狸を懲しめてやんなねていうわけで、まず最初に狸どこさ遊びに行った。

「狸、何しった」「兎か」「今日、一つ、山さ柴伐りに行かねか、おれ行くところだから、お前もあえべ」「んだか、おれも行ってみつか」

て言うわけで、狸どこ連て柴伐りに行っただ。

そうして、ええころ柴伐って、兎も背負って、狸も背負って、そうして山道とことこ来たところが、狸ば先立ちにして、兎はうしろ火打石でカチンカチンていわせて、火出した。

「兎、兎、なえだここまで来たらばカチン、カチンと音すんの、何だ^{なん}」

「ああ、こいつ、ここはカチカチ山だ。んだからカチンカチンて音すんのよ」

そして、空とぼけて、そしてこんどは兎は火あ出たもんだから、そっと狸の背中さ近づいて行って、柴さ火点けた。と、暖かい春先なもんだから、たちまちに

火はボオーツと燃え上がった。

「なえだ兎、ここまで来たれば、うしろでボーツて音すんな。ありや何だ」

「うん、ここは、ボーボー山ていうんだ。んだから心配すんな」

こういうわけで、ほうしているうちに、こんどは狸の背中熱くなってきたもんだから、「アチチ……」て言うけあ、狸は一生けんめいに走った。そうすつどますます火は燃え上がって、そして狸の背中は丸焼けになった。

火傷して狸は孔の中ではあ、うなつて飯も食ねで寝っただけどはあ。こんどは兎は、

「一つ、火傷の薬、味噌でも持つて行つて塗だぐて呉^けつか」

こちくたま、今度播鉢で味噌すつて持つて、そして狸のどこさ行つたど。

「狸、狸、何した」

「いやいや、あのボーボー山で背中さ火のいたさつだもんで、背中焼けて、痛くて痛くて」

「ほだったか、おれは焼けねがつたげんど、お前焼けたのか、ほんじゃ火傷の薬

持つて来た。妙薬だから、背中出せ、つけて呉けっから」

て言うわけで、狸の背中さ、挿鉢ですった味噌、べったりとつけて呉けったもんだから、こんどは狸は痛くて、いや大声あげて泣くなだど。はつけなことかまねで、

「この畜生、おはあさんば殺したんだから」

と思つてはあ、兎はてんと家さ来てしまつたど。

「はて、これからなじよして呉けだらええか」

と思つて、また兎はおじいさんどこさ行つて、相談して、こんど、一つ川原せさ連て行つて、川さ沈めて呉るちゅうわけで、こんど兎は舟こしやえ、一そのの舟は木の舟、一そのの舟は泥でこしやつたど。そうして泥舟を干して、ええ頃になつてから、こんど狸どさ行つてみた。

「狸、なじよだ」

「ああ、兎か。ああやつとまず背中ええぐなつて、こんど遊あそばれるようになったかなあ」

「ああ、そうか、そいつあええがった。んじゃ今日は山でなく、川さ遊びに行くべ」

「なえだごど。川さなて……」

「いや、舟こしやったから、舟遊びあえべ」

「ははあ、そりや面白いがんべ。んじゃ、おれ行ぐだい」

て言うわけで、狸はこんど兎と一緒に川原さ来た。ほうして兎は木の舟さのつて、狸を泥舟さのせて、ええ気で、川の中さ漕ぎ出した。そうしてええ頃深いどさ来た時、兎は、こんど持つてだカイでもつて、狸の舟を叩いて、バンと叩いてやったところが、泥舟なもんだから、その舟は二つに割つて狸はドンブリと水の中さつかってしまった。ほうして、狸は「助けろ、助けろ」て悲鳴を上げたげんど、兎は、

「何、この畜生、おばあさんのどこ殺したでねえか。お前、仇討ちして呉つぞ。お前のような悪い者は死んでしまえ」

ていうわけで、そんなものさかまねではあ、兎はトンと上がってきてしまった。

そうしておじいさんのどこさ来て、その話をして、とうとう仇討ちしたと。とーびんと。

7 地蔵浄土

むかしむかし、あるところによいおじいさんとよいおばあさんといっただけ。そうしておじいさんが庭で掃き掃除してたところが、一本の稲穂拾ったと。そいつ大事に家さ持つて帰って、そいつで団子を作ったと。ほうしたれば、その団子はこういうはずみか、一人でコロコロ、コロコロと動き出した。しておじいさんがその後から団子さ追っかけて行ったところが、小さな孔がある。そこさ団子はコロロと入って行ったと。ほうしておじいさんもまたその底のぞいて見たところ、その孔の中、大変に広く見えるもんだから、おじいさんもまたソロロと入って行った。ほうして中さ入って行った団子はコロリ、コロリと転がって、そうし

て行くもんだから、おじいさがその後からついて行つたど。そうして、しばらく行つたところが、そこにお地藏さまが立つてござつた。ほうしてそのお地藏さまの掌さ団子がちよこんと上がった。ほうすつどおじいさんは、その団子の、土のついたところをむしり取つて、自分が食べて、きれいなどこをお地藏さまさまた上げ申した。そうしてゐるうちに、お地藏さまのおっしゃるには、

「じじ、じじ、おれの掌の上さあがれ」

「いや、もつたいない、もつたいない、お地藏さま。お地藏さまの掌さなて、上がれるもんでない」

「ええから、上がれ」

ておっしゃるもんだから、おじいさんが掌の上さあがつた。そうしたればこんど、

「肩の上さあがれ」

「いやいや、もつたいない、もつたいない、肩の上さなて登られるもんでない」

「いや、ええから上がれ」

て言われ申すもんだから、おじいさん、また肩さあがった。こんどは、

「おれの頭の上さあがれ」

「とんでもない、お地蔵さま、おれの身分でお地蔵さまの頭の上さなてあがったれば罰当る」

「ええから上がれ」

て言われ申すもんだから、おじいさんが頭の上さのつた。そうしたれば、

「その梁の上さ行つて隠れろ」

こう、お地蔵さま、おっしゃった。んで、おじいさんがこんど梁の上さのぼつて、そうしてそこにいたところが、しばらく経つて、ガヤガヤ、ガヤガヤて何か音すつど思つたところが、赤鬼だの青鬼だの集まつて来た。そうしているうちにだんだんと赤鬼、青鬼あいつぱい集まつて、

「ああ、みんな集まつたから、一つ始めだらええがんべ」

て言うわけで、バクチ打ちはじめだ。ほうして丁だ半だているうちに、お地蔵さんが小さな声で、

「じじ、じじ、鶏のまねしろ」

「はい」ていうわけで、おじいさんが「コケコッコー」とやったど。そうすつど鬼ども、

「あつ、鶏あ鳴いた。んだげんど、まず一番鶏だから、まだだ。もう少し早めにしろ」

て、またひと盛りガヤガヤて始まった。やがて頃合い見て、またお地藏さま、

「じじ、いま一ぺん鶏のまねしろ」

またこんど、おじいさんがコケコッコーて鳴いた。

「あつ、二番鶏だ。さあ三番鶏になつど夜明けんど、早くやったやった」

なて、こんどいるうちに、お地藏さま、「じじ、三番鶏だ」て言われるもんだから、おじいさんがこんどさつきよりもほがらかな声出して、コケコッコーとやったど、

「やあ、三番鶏だ、あべはあ、あべはあ」

て言うけずあ、そのままにしてはあ、バクチ散らかして鬼ども皆尻さかさにし

て逃げでしまった。ほうすっどお地藏さま、

「じじ、降りてこい、また頭の上さあがれ」

「いやいや、もつたいない」

「ええから上がれ、肩の上さあがれ」

「ああ、もつたいない、もつたいない」

「ええから掌の上さあがれ」

て言われるままに、おじいさんまた降りてきて、お地藏さんの前さびたーっと頭を下げて、そうしていたところあ、

「じじ、そこにある金、みなお前さ呉っから、そいつ持って家さ行げ」

そうしておじいさんはそこらに散らばっている錢だの、宝物だの、お地藏さまに頂戴して、ヤッコラサと持って家さ帰って来たど。そうして家さ来ておばあさんにその話して、炉端でその地藏さんにもらって来た錢だの、宝物なの並べて、喜んで眺めったらば、そこさ隣の欲の深いおばあさんが火もらいに来た。

「こんにちは、また火一つ呉てけらっしやい」

おばあさん、ガラーツと表の戸開けて、家の中見たところあ、その通り、まず銭だの宝物なの並べていたもんだから、「あらら……なえだまず、そがえにいつぱい、こっちの家では何して、こがえもうけたべ」

て言うもんだから、もともと氣持のやさしいおじいさんとおばあさんなもんだから、今までの一部始終の話をして教えた。

「ほんじやらば、一つ、おらえのじんつあどこもやってみんなね」

て言うわけで、火もらいも忘れではあ、おばあさんがトントンと家さ帰ってき
た。そうして早速団子をこしやっただけでも、その団子転ばねじだ。こんど仕
れないもんだから、じんつあ一人、棒で転ばして孔こさ入って見たところ、またそ
こも入って行かれるようになっているもんだから、おじいさんそっから入って
行ってみた。そうして入って行ってみたところが、やつぱりそこにお堂が建って、
お地藏さまがござったど。ほうすっど、じんつあ、まずその団子、土ついたまま、
何構ぬ、^{かま}上がれても言^やんねの、掌さ上がり、肩さ上がり、頭さ上がって、梁の上
さあがって行つた。

ほうしているうち、また赤鬼、青鬼など、ガヤガヤ、ガヤガヤと集まって来て、またバクチ始めた。お地藏さまに鶏のまねしろなて言わんねげんども、話は聞いてるもんだから、その隣のじんつあ、大概ここらでええがど思つて、コケコッコーとやった。

「あつ、またシンポない。今日は早いようだなあ、ほだげんど鶏鳴くぜはあ、何だなえべ、こりや、急げ急げ」

なて、こんどまたひとしきりバクチ打ち始まつた。ここらでまたええがんと思つて、今度は隣のじんつあ、またコケコッコーとやった。

「やつ、何だか今の音おかしいげんど二番鶏だな、まあやれやれ」
なているうちに、こんどじんつあも今度面白くなつて、

「一つ、三番鶏、うまくやつてみんべ」

と思つて、下つ腹さ力入つて、すばらしい音出してやつたぞも。やつたどこあええがったげんども、あんまり下つ腹さ力入ったもんだから、その拍子にブウーと一発やつてしまった。

「あつ、何だこりや、今んな鶏でねえ、人間だ、こりや」

て言うけずあ、鬼どもは、「あそこだ、あそこだ」なて言うけずあ、じじどこ引ずり落して、

「ゆんべなも、貴様だったな」

なて言うけずあ、じんつあ、さんざんな目に会つてはあ、銭などもらうどころか、ほうほうの態ではあ、鬼どもに殺さつてしまつてどはあ、こんどは隣のばあさんが、

「たいがい、おらえのじんつあも銭と宝物いっぱい背負つて来る頃だ」と思つて待てど暮せどなかなか来ね、そうしているうちに、じんつあはどうとう出て来ねもんだから、

「こりや、ゆんべの話どおり、じんつあ失敗してはあ、鬼どもにはあ、命とらつじやもんだと思つてはあ後悔したど。とーびんと。

あとがき

この昔話集は昭和四十九年夏、南陽市漆山地区の民俗調査を置賜民俗学会で実施した際に聴くことのできたものを第一部とし、それに佐藤七右衛門氏が『宮内文化資料』に分割掲載された伝説の中から、特に〈口承文芸〉として意味のあると思われるものを加えたものであり、さらに長井市五十川にお住まいの大道寺氏から、昭和四十九年九月に、菊地隆知氏と藤原民夫氏と共に聞き取ったもので、大道寺氏からは、これで二度目である。それを第二部として掲載したものである。

南陽市漆山では平井とよさん、佐藤七右衛門氏というすぐれた語り手を発見できたが、まだまだ調査が充分とは言えなかったが、人口の流動の激しい地区でもあり、そのために消え去ってしまったものもあつたと思われるのは残念である。また昔話は子どものものという認識もあり、今後の調査を加えて分布などを考える必要があるように思う。

大道寺氏の昔話については、すでに〈民話の研究会〉の会員内藤さんの調査に

うながされてお聞きしたもので、重厚な語り口は前回のもの同様に貴重な資料といえる。夏の昼さがりに蝉のかまびすしい声を聞きながらの採訪が、今テープを聞きながらなつかしさがよみがえってくる。

この昔話集を編むに当って、多くの話者にお世話になったが、その上、南陽市漆山公民館の館長で珍蔵寺の住職武田さん、公民館の理事長谷川さん及び、置賜民俗学会の会長江田忠先生はじめ、調査に同行下さった方々、そして当地の会員小川弘氏の好意を忘れるわけに行かない。深い感謝を捧げるものである。

昭和五十年二月

むかしあつたけど

漆山の昔話と伝説

大道寺翁の昔話

昭和五十年二月二十日 発行

編者 武田 正

南陽市三間通二三二―三

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十八年三月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇三三―六八八―七五四四